

コロナ時代の非対面オンライン外国語授業について の一考察

李, 相穆
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4377786>

出版情報 : 言語科学. 56, pp.57-62, 2021-03-23. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

コロナ時代の非対面オンライン外国語授業についての一考察

李相穆

1. はじめに

新型コロナウイルス (COVID-19) に伴う日本国内の学校の臨時休校により、これまでの教育のあり方、授業の進め方について考えた人も多いただろう。今まで CALL 教材や Web 教材を利用したことのない教師もオンライン授業の対策に追われる日々を過ごさなければならなかったはずだ。

大学の専攻科目と異なり、学習者と教師との対面のコミュニケーションがより重要な役割を果たしている外国語教育分野もオンライン授業を余儀なくされるようになった。オンライン教育というのはそれほど目新しいものでもなくすでに技術的な環境が整っているといえる。ただ今回のように教育機関が苦労した理由は、対面授業からオンライン教育への転換の準備ができておらず、元の教育の形式への復帰（オンラインから対面への転換）の時期を見極めることができなかつたことが一因であろう。今、大学でオンライン授業が始まってから一年を迎えようとするが、教師、学習者ともにオンライン教育についての意識は大きく変化しているように思われる。対面授業の補助手段としてしか位置付けられていなかったオンライン授業が対面授業に代わる可能性を感じている人もいるだろうし、オンライン授業のデメリットや限界をより強く認識した教師、学生もいるだろう。本稿ではこういったコロナがもたらしたオンライン授業について現状と発展の可能性を探ってみることにする。

教育の場でコンピューターの計算能力の活用を初めて試みたのは実は 40 年以上の前のことだが、その学習効果や教材開発の方向性の面で挫折が繰り返されてきた。宮本(2001)はマルチメディア語学学習に関する実証研究の方法論の問題で、実証研究が進まない一因として技術革新の速さを指摘している。本来は、ある新しい技術が開発されると現場で実践が行われ、その利点や問題点がある程度明らかになり、さらに、その結果を受けて次の改良や開発が始まる。しかし現状は、技術に対する安易な期待感から開発が進み、新技術が需要を作り出していると述べている。新しい教授法や教材の方がきつと効果があるだろうという誤った信念も教材の技術面だけを追求し理論的実証が進まなかつた一つの原因といえよう。不測の事態で始まった非対面オンライン教育ではあるが、学生の学びを保障するためには、オンライン授業をする必要性が減る時がくるとしても対面と非対面の学びの特徴をしっかりと把握しておく必要がある。教育というのが主に対面での学びを重要視することには異論はないだろう。それは表面的な情報や知識の獲得だけが本当の教育の目的ではないためである。その点から考えた場合、非対面教育は対面の教育よりある意味、望ましくないことになる。では非対面の教育に欠けているものはなんだろうか。それは非対面の教育では直接的な経験を学生に与えることが簡単ではないことである。まずインターネットを通じたモニター越しのコミュニケーションは実際の言語生活でのコミュニケーションとどのように違ってどのような教育効果をもたらすのかを調べなければならない。

コロナで注目され始めたオンライン授業は、学生も教師も好むと好まざるとにかかわらず誰もが経

験せざるを得なかった。これにより、オンライン授業のメリットはなにかデメリットはなにかについて意見交換ができる土台が構築されつつあるともいえる。オンラインと対面それぞれの教育効果、さらに対面とオンライン併用の教育形態についても具体的な研究が求められる。

2. コロナ禍での外国語教育-日本語教育機関における「オンライン授業実施状況に関するアンケート」

日本語教育機関向け学習支援サービスを提供している会社(JELLYFISH)が行った国内の日本語教育機関への「オンライン授業の実施状況アンケート」の結果を紹介したい[1]。調査期間の2020年8月は新型コロナウイルス感染症の国内発生が第2波と呼ばれている感染者がピークに達した時期であり、学期が始まった4月より学生も教師もオンライン授業に慣れてきた時期だと思われる。外国語教育期間がコロナの事態にどのように対応していたかを探る貴重なデータである。

実施概要

- ① 調査名：オンライン授業の実施状況アンケート
- ② 対象者：日本語学校関係者
- ③ 調査方法：インターネット調査
- ④ 回答数：55校、64名（経営者、校長、学務主任、専任、非常勤講師、その他）
- ⑤ 調査機関：2020年7月31日～8月18日
- ⑥ 調査目的：新型コロナウイルスの感染拡大により急務となったオンライン授業について、日本語教育現場における現状と課題を可視化すること。また調査結果を公表することにより、不足情報の提供につなげるために実施。

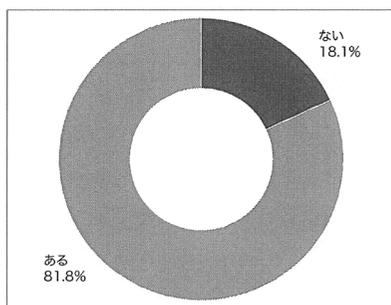


図1. これまでにオンライン授業を行ったことがありますか。

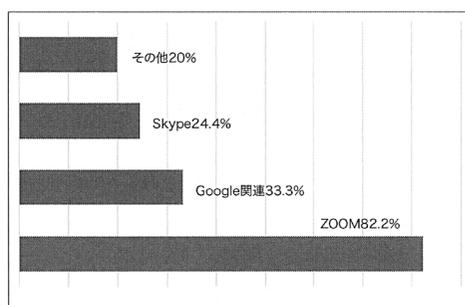


図2. どのツールを使ってオンライン授業を行っていますか？

オンライン授業を行った経験があるかについての質問に81.8%が行ったことがあると答えている（図1）。この結果から、多くの日本語学校が従来の対面授業を行うことができずオンライン授業に移行していることがわかる。オンライン授業に使っているツールを聞く質問については図2のような答えを得ている。それぞれのプログラムは独自の機能を持っているが、対面授業に類似した授業がよりスムーズにできるZOOMがよく用いられている。ZOOMが選ばれる理由としては、多機能の他のツールより使い方が簡単で慣れるのに時間があまりかからないことが考えられる。もう一つの理由としては、ブレイクアウトルームを通じて実際の教室での授業でのペアワークを再現できる機能がついているからで

あろう。リサーチ会社「アンド・ディ」が5月11日に発表した「休校期間の勉強に関する高校生調査」でも、オンライン授業のツールについて、ZOOMが39.3%、Google Classroomが21.3%を占めていた[2]。

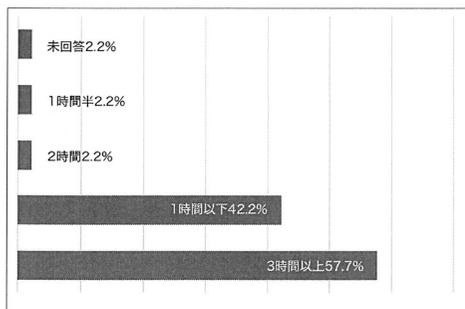


図3. 1回のオンライン授業の授業時間について教えてください。

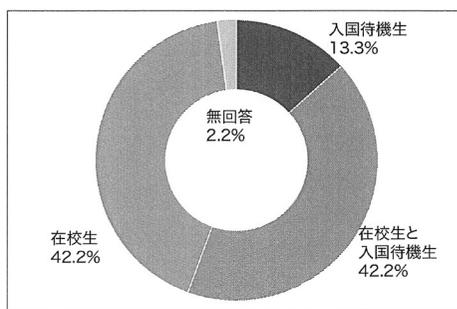


図4. オンライン授業は誰に実施しましたか？

図3の「1回のオンライン授業の授業時間について」は57.7%が3時間以上オンライン授業を実施しており通常授業の代替装置としてオンラン授業を利用していることが分かる。その対象としては在校生だけでなく入国待機生にも活発的に遠隔授業を取り入れていた(図4)。図5には今までオンライン授業を行ったことがあるとの回答のなかで「オンライン授業で困ったこと」を複数回答で聞いている。もっとも多かった回答は、学生のネット環境の問題である。来日前の学生の自国のネット環境が一律ではないこと、日本国内でもアクセスが集中する時間帯での利用は非常に困難だということがわかる。また、今回のコロナ禍で予定していなかった教材の作成や準備が大変だったこともわかった。対面授業と類似したZOOMを利用した授業でも学生の端末に表示する資料の準備や評価するための教材も必要だったと推測される。

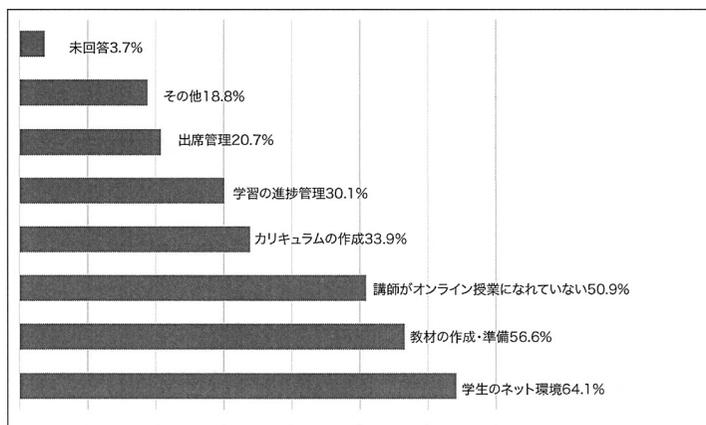


図5. オンライン授業で困ったことはなんですか？

3. 教師が考えるオンライン教育

Yoon(2001)は大学教員のオンライン授業運営に対する意識を調べるため大学所属の教員135名にアンケート調査を行った。教員がオンライン授業で行った授業方式としてはPPTの録画資料のアップロード(55.6%)、講義室での授業録画のアップロード(25.2%)、リアルタイム授業(8.1%)、PPTやPPTファ

イルのアップロード(5.9%)、動画資料(Youtube など) のアップロードの順であった (表 1)。

表 1. オンライン授業の進行授業方式 (Yoon, 2000)

	人数	%
PPT 録画ファイル	75	55.6%
教室での授業録画	34	25.2%
リアルタイム授業	11	8.1%
PPT, PDF アップロード	8	5.9%
動画資料の提示	7	5.2%

その授業方式を採用した理由については多くの教員が利便性を理由に挙げていた。55.6%の教員が採用した PowerPoint の録画機能を用いて資料と教員の音声を録画する形式についても、採用の理由としてはやはり「慣れている」「簡単だから」という意見が多かった。教員も学生も時間と場所に拘束されず、またネットワーク回線のトラブルも心配する必要なく好きな時間にアクセスして利用する形態を好んで導入していたことがわかる(表 2)。

表 2. オンライン授業の利用方式を採用した理由 (Yoon, 2000)

	理由(人数)
PPT 録画ファイル	慣れているから(43) 簡単だから(19) 学習に効果的だから(10) 学生の要望(3)
教室での授業録画	慣れているから(11) 簡単だから(11) 学生の要望(1) 学習に効果的だから(10) やり方がわからないから(1)
リアルタイム授業	慣れているから(1) 学習に効果的だから(6) 学生とのコミュニケーションのために(4)
PPT, PDF アップロード	慣れているから(5) 簡単だから(1) 学生の要望(2)
動画資料の提示	慣れているから(4) 簡単だから(3)

オンライン授業実施の難しさについての質問では、オンライン授業では学生の学習状況を把握することが難しく(58.8%)、オンラインプラットフォームの使い方についての不満が多かった(16.3%)。授業用の資料を作成することの大変さや時間や場所の問題もオンライン授業実施の難しさとして挙げられていた(表 3)。

表 3. オンライン授業実施の難しさ (Yoon, 2000)

順位	内容
1	学生の理解度や学習状況を把握するのが困難(57.8%)
2	オンラインプラットフォームについての不満(16.3%)
3	授業用の資料を作成するのが大変(12.6%)
4	授業を準備する時間と場所の問題(5.9%)
5	ネットワークの問題(4.4%)
6	その他(3.0%)

4. 学生が考える e-Learning

4.1 学習者が考える e-Learning の利点と欠点

2016年2月K大学の大学1年生464名を対象にアンケート調査を行い、外国語学習者の学習環境やe-Learningについて持っている意識を調べた。表3に学生がe-Learning外国語学習について感じている利点と欠点をまとめた。一般的に言われているe-Learningの利点については学生もほぼ同じ見解を示している。時間や場所の制約を受けない点や反復練習ができる点が利点だと考えている。しかし、欠点の項目からわかるように、様々な不満を持っているようである。これはe-Learningという新しい学習ツールに対する期待感だけをもって開発が進められている現状に大きな方向転換の必要性を示していると捉えられよう。教師からの視点だけでなく学生がどのように感じていてどのようなものを求めているのかさらなる研究が必要だと思われる(表4)。

表4. e-learningの利点と欠点

利点	欠点
<ul style="list-style-type: none">・時間、場所、空間の制限がない。・何回も復習できる。・自分のペースで学習できる。・学習したいときに学習できる。・すばやく大量の情報を得ることができる。・リスニングの勉強がやりやすいと思う。・紙といった資源の無駄使いを減らす。・採点が早い。・準備が楽。・音声や画像を利用できる。・授業外での自主的学習を促す。・正解かどうかがすぐわかる。	<ul style="list-style-type: none">・ネットで問題が発生すると活用できない。・分からないときにすぐ聞けないこと。・学習意欲が湧きにくい。・計画的にできずにためてしまう。・面白くない。・記憶に残らない。・勉強した気にならない。・勉強している実感が無い。・目が悪くなる。・頭がいたくなる。集中できない。・手で書かないから覚えにくい。・受身の学習で退屈。・気が散る。

4.2 外国語教材に対する学生からの要望

学生からの要望が多かったのはスマホでも利用出来る外国語教材だった。現在の大学の外国語教材は学校のパソコンを利用したLMS(Learning Management System)が多く、それを利用するためには学校に来て課題をこなさなければならない。つまり、学生が利点として取り上げていた時間、場所の制約を受けないという特徴が生かされていない状況にある。対話形式や映像コンテンツ、自分の苦手なところをフィードバックしてくれるようなよりインタラクションに富んだ教材を必要としている(表5)。

表5. 外国語教材に対する要望

要望
<ul style="list-style-type: none">・スマートフォンでもできる教材。・対話形式のもの。・話し口語(ネイティブが実生活で使うフレーズ)などが学べる教材。・映像コンテンツ。・自分の苦手なところを洗い出してくれるようなシステム。・学習方法を監視したりして評価をつけないもの。・毎日簡単にできるもの。・毎日やりたくなるような工夫。

5. 非対面オンライン授業の問題

冒頭でも述べたようにオンライン授業はそれほど最新の授業形態ではない。放送大学の遠隔授業や

サイバー大学などのCALL教材がさまざまな分野ですでに取り入れられている。近年はMOOCsなどのインターネットを通じた学習環境も利用できる。現在は非対面授業がCOVID-19によって急速的に拡散されている状況である。しかし今までオンラインという技術的な利点を除けば、オンライン授業と対面授業の関係はつねにオンライン教育は対面教育より望ましくないものとして扱われてきた。

実際にインターネット授業やオンライン授業を経験してみると、学習の最初段階では興味を示した学習者もすぐ興味を失い始めることがよくある。オンラインで学習するとなぜか勉強した気がしないという不満を言う学習者が多くいることを考えると、学校やさまざまな教育の場の存在というのは、「単なる学習するための空間」を超えた意義があるのだろう。非対面授業には対面授業のような経験が得られないことを理由に挙げる意見が多い。対面授業からは教育的経験をもちたすことができる反面、非対面オンライン授業ではそれができないという感覚は、非対面授業が持っている根本的な限界から派生したと思われる。

それではその限界を克服することはできないのだろうか？その答えは、より現実を類似した形で再現できる技術の進歩ではないように思われる。非対面授業は対面授業よりより良い教育的効果を与えることはできないという前提に立たず、まず両者の違いを徹底的に分析した上で二つの種類の教育が同じ効果を生むように開発が進まなければならない。

6. 終わりに

本稿ではではコロナ禍で行われている外国語教育を概観することでこれからの外国語教育の新しい形について考察してみた。また、大学生のe-Learning外国語学習に対する意識を調べるため学生からアンケート調査を行いその結果を報告した。e-Learningを取り入れた外国語学習機関が増えてきているが、学習が行われる環境には様々な要素が絡んでいる。新しい学習教材、学習方法、学習リソースが溢れているが、まだ教育方法や利用法が確立されてないため、先行の研究や実験などに頼って開発を進めるしかないのが現状である。教師や教材の製作者側からの視点だけでなく、その教材を実際に利用する学生からの視点にも立った教材開発を考えていかなければならない。

参考文献

- [1] コロナ禍の日本語教育機関における「オンライン授業実施状況に関するアンケート」 <https://primes.jp/main/html/rd/p/000000020.000020441.html> (閲覧日：2021年2月1日)
- [2] 休校期間の勉強に関する高校生調査「新型コロナ関連自主調査」 https://www.and-d.co.jp/2020/05/11/survey_corona_school/ (閲覧日：2021年2月1日)
- [3] 宮本節子(2001)『マルチメディア語学学習教材の開発と評価』 溪水社。
- [4] 李相穆(2020)「外国語教育におけるe-Learningの学習効果に関する一考察-大学生を対象としたアンケート調査に基づいて-」『言語科学』第55号 pp.87-92.
- [5] Jiwon Yoon(2020) A study on the C University Professor's Perception of the Online Class, *The Journal of Humanities and Social Sciences*21, pp. 2413-2426.
- [6] Lee Seunghyun, Kwak Duck-joo(2020) Why Do We Educators Find Ourselves Uncomfortable with Online Teaching?: Philosophical Examination on the Educational Possibilities and Limitations of Tele-Education, *The Korean Journal of Philosophy of Education*. Vo.24 No.3. pp.109-132.